北朝鮮の粛清劇の影響について

矢野義昭

北朝鮮では、張成沢が粛清されるという政変が生じた。しかしナンバーツーの存在を許さないこれまでの北朝鮮の独裁体制の歴史から見れば、今回の粛清劇は、金正恩の独裁権力樹立の過程で必然的に生ずることであると言えよう。いずれ張成沢は粛清される立場にあった。

また今回の粛清による政策への影響であるが、張成沢が影響力を振るっていた経済政策についても、特に大きな影響を受ける可能性は少ないと見られる。誰がトップになっても経済改革は経済再建のためには必要不可欠であり、そのことを金正恩自身もよく承知している。そのことは、金正恩の第一書記就任前後の言動からもうかがわれる。

他方、核とミサイルの開発についても、周辺の大国からの自主独立と干渉を拒否するための切り札であり、体制護持には必要不可欠との認識が、遺訓として金正恩に継承されていると見られる。したがって、核ミサイル開発路線にも影響はないであろう。

今回の粛清劇の狙いは、政策の変更ではなく、それらの政策の推進にあたり意思決定をするのは金正恩という独裁者のみであるという、独裁権力の樹立を内外に示すことにあったと評価できよう。今後、金正恩の独裁下で経済改革と核ミサイル開発配備が並行的に、若い世代を中心にして進められることになると見られる。